

朝鮮学校生にとっての〈祖国〉の意味

山本かほり（愛知県立大学）

“Meanings of ‘Homeland’ for Choson School Students”

YAMAMOTO, Kaori(Aichi Prefectural University)

キーワード：祖国，ナショナリズム，在日朝鮮人，朝鮮学校

本報告の目的は朝鮮学校にとっての〈祖国〉とは何かを考察することにある。朝鮮学校が〈祖国〉としているのは、日本においては絶対的に他者化された「北朝鮮」、朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）である。本国の朝鮮半島が冷戦構造の中で南北に分断されているという現実のもと、朝鮮学校が北側の朝鮮を正当な国家としてみなし、今でも「ウリナラ（私たちの国）」として一体感をもっているのには、歴史的な背景がある。二つの国家の成立過程に関する歴史的解釈にプラスして、学校が大きな根拠としているのは、1957年以降現在に到るまで朝鮮から送られてきている「教育援助費・奨学金」である。しかしながら、この朝鮮との関係こそが、朝鮮学校に対して、たとえば、高校無償化から排除、補助金の停止等の公的な差別、在特会などから暴力的な排斥など、官民一体の差別をうける理由となっている。

このような「攻撃」をかわすために、朝鮮学校を「擁護」するメディアは、確かに、以前の朝鮮学校は朝鮮との強い関係をもっていたが、今はその関係が希薄化していると主張する。だから、朝鮮学校を排斥することは正しくないという論調だ。また、ここ2-3年、活発に発表されるようになった朝鮮学校研究の成果も、朝鮮学校と朝鮮の関係を扱っているものはほとんどない。確かに、現在の日本社会の状況にあって、朝鮮との関係について言及することに困難がついてまわることは事実である。

しかしながら、私自身の3年間にわたる参与観察からみえてくるのは、朝鮮学校と朝鮮の関係が、排斥する立場のメディアが主張するような「従属的」でないものであることはもちろん、「擁護」する立場のメディアが主張するように「希薄化している」とも簡単には言い切れないということである。

もちろん、朝鮮学校がもつ理念的な「祖国」感＝朝鮮観と、朝鮮学校に関わる個々人が持つ「祖国観」なり「朝鮮観」とはギャップがあることは事実だ。しかし、生徒にしても保護者にしても、朝鮮に対しては一体感なり愛着をもっていることが、参与観察からみてとれる。

朝鮮学校関係者にとって「祖国」とは何だろうか？なぜ、あの朝鮮に愛着をもち、「ウリ

ナラ (=祖国)」とするのであろうか。

本報告では、これらの問いへの答えを探る第一歩として、これまでの調査から得た知見を報告する。(1) 朝鮮学校卒業生、保護者、現役の生徒たちへのインタビュー調査の中で朝鮮をどのように語るかを分析 (2) 2013年6月10日～6月22日、2014年5月29日～6月12日に実施した愛知朝鮮高校3年生の「祖国訪問」(朝鮮への修学旅行) 同行調査からの知見を中心に分析を行いたい。そして、かれらが、単なる上からの「愛国心」としての「祖国」ではなく、自分たちなりに、再解釈し、再構築した「祖国」の中身を分析していくことにする。